

自然と文化科 活動記録 (公開講演会)

日時	2024年3月15日(金) 10:00~12:00	担当者
場所	クロスパル高槻8階イベントホール：午前 公開講演会 ：午後 各種会議	文：鈴鹿 絹代 写真：日下部 一一
備考	参加者数 1班20名 2班20名 3班20名 4班19名 外部 6名 合計85名	

＜公開講演会＞

テーマ：縄文人から弥生人へ 一日本人形成史の謎を追うー

講師：中橋 孝博 先生（九州大学名誉教授）

講演要旨

1. 明治時代から長い間にわたってやり取りされてきた日本人の起源論で、もっとも議論をよんだのは縄文人から弥生人への移行についてであった。

- ・土着の縄文人がそのまま弥生人へと移行したのか。
- ・大陸から稲作や金属器文化を伴った渡来人がきて、土着の縄文人集団と入れ替わったのか。
- ・縄文人と渡来人との間で混血がすすんだのか。

それぞれの説があったが、弥生人骨の出土はごくわずかで最初に水田稲作を始めた人たちの具体的な姿は長い間分からなかった。

2. 昭和30年頃になって、北部九州各地の遺跡及び山口県の土井ヶ浜遺跡等から多数の弥生人骨が出土した。これらの遺跡は地理的に海峡を挟んで大陸と向かい合った地域にあり、長く不明であった弥生時代人の姿が浮かび上がってきた。

3. 昭和53年頃、北部九州の弥生時代を代表する遺跡として知られていた板付遺跡で、弥生前期末地層からさらに40cmほど地下の、当時は縄文時代と考えられていた地層から水田跡、炭化米、石包丁、木製の鋤等の農耕具が発見された。佐賀県の菜畑遺跡やその他の遺跡からも類似の発見があり、その結果、北部九州では、これまで縄文晩期と考えられた時代からすでに水田稲作が開始されていたことがわかった。

4. 多数出土した弥生人骨は弥生前期末以降のもので、その前の縄文晩期から弥生時代開始期にかけての移行期の人骨が見つかっていない。おそらく最初に北部九州にやってきた渡来人の水田稲作集団は、土着の縄文人集団が少ない沿岸低地で水田を作り始めたと思われる。狩猟・採集と原始農耕で生活していた縄文人集団にとって沿岸低地は大切な土地ではなかった。少数の渡来人は周りの縄文人とも交わりを持ちながら世代を重ねて人口と水田を増やしながら、地域人口の多数を占めるようになったと考える。

＜感想＞

縄文人から弥生人への移行について、現在分かっていることと不明な点について分かってきた。なにをもって人類とするか、人類と類人猿との分岐点も興味をもって受講した。

